

琉球王国の歴史と文化を象徴する首里城の早期再建に関する要望決議

昨年10月31日未明、首里城で火災が発生し、御庭（うなー）を囲む正殿、北殿、南殿の主要建造物と書院・鎖之間（さすのま）、黄金御殿（くがにうどうん）、二階御殿（にーけーうどうん）、奉神門の7棟、あわせて約4800平方メートルと琉球王国の多数の美術工芸品が焼失し、県民に大きな衝撃と深い悲しみを与えた。

沖縄は、あの苛烈な沖縄戦によって、20万人余の尊い命が奪われるとともに国宝文化財22件すべてを失い、琉球王国の歴史と文化を象徴する首里城をはじめ、先人から引き継いできた歴史的な重要文化遺産が焼失し、破壊された。

そこで、国は、戦災文化遺産である首里城の復元を求める県民の運動に応じて、1992年（平成4年）、沖縄の日本復帰20周年を記念して、琉球王国の歴史と文化の象徴である首里城の正殿、北殿、南殿などを復元し、国営沖縄記念公園・首里城地区『首里城公園』として一部を開園、その後も順次整備を行い、昨年2月の御内原（おうちばら）の完成で全エリアを公開した。

沖縄県民は、琉球王国の文化遺産の復元と伝統文化の保存継承には強い思い入れがあり、復元された首里城は、沖縄のアイデンティティの形成や文化の発展、万国津梁としてアジアを結ぶ貿易と平和交流の架け橋を願うウチナーンチュの心のよりどころとなっている。

2000年（平成12年）12月には、那覇市にある首里城跡、園比屋武御嶽石門（そのひゃんうたきいしもん）、玉陵（たまうどうん）、識名園をはじめ、今帰仁城跡、勝連城跡、座喜味城跡、中城城跡、斎場御嶽（せーふあうたき）の県内9カ所の文化遺産が中国と日本の築城文化を融合した独特の建築様式や石組み技術、文化的景観等には高い文化的・歴史的価値があるとされ、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として日本で11番目の世界遺産に登録された。

世界に誇る琉球王国の貴重な歴史的文化遺産を回復する目的で復元された首里城は、新たな県民文化の創出と伝統技術の継承・発展を図り、歴史的風土探訪の場として、年間約280万人の観光客を集めるなどの大きな役割も担っている。

しかし、今回の火災によって、その新たな役割とともに沖縄のアイデンティティ、文化、観光、経済の発展、文化遺産の復元保存などにも重大な影響を及ぼす事態となっている。

よって、本町議会は、県民が切望する琉球王国の歴史と文化を象徴する首里城の早期再建を実現するよう下記事項を強く要望する。

記

1. 首里城の早期再建をめざし、国と県、関係機関が連携して日本復帰50周年を迎える2022年（令和4年）までに防火・防災に強い再建基本方針、基本計画等を策定すること。
2. 一刻も早い首里城の再復元をめざし、2032年（令和14年）までの復帰60周年記念事業として特別な財政措置を含め積極的な推進を図ること。

3. 県民をはじめ、首里城の再建を願う多くの人々の力と英知を結集して心ひとつに取り組むこと。

以上、決議する。

令和2年 3月27日

沖縄県八重瀬町議会

あて先

衆議院議長
参議院議長
内閣総理大臣
内閣官房長官
国土交通大臣
沖縄及び北方対策担当大臣
文部科学大臣
文化庁長官
沖縄県知事